補助食品の説明をしたりもしてる。こんな感じでね」

久米さんが「ダイエットの指導もしています」とおっしゃると、福島さんは「そうそう♪」と言いながら、机の中からコーラやらどら焼きやらカップ焼きそばやらを抱えて持ってきてくださった。

トロミ補助食品を実演してくださる福島さん

主任さんのおやつですか?

福島「違うってば! これはジュースやお菓子、カップ麺にどれだけの糖分が入ってるかを患者さんに知ってもらうための教材! キョ・ウ・ザ・イー!」

「でも両手にお菓子持ってる人って、ほんと食いしん坊に見えますよね……」と冷静に分析する久米さんを横目に福島さんいわく

「ダイエット指導は彼女たちに担当してもらってるねん。私がダイエット云々言っても、ちっとも説得力ないからね(笑)」

いえ、決してそんなことは……。

ザ・食いしん坊主任!?

日常業務 ～ 電子カルテその他

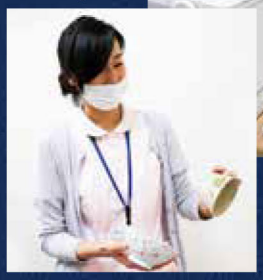
あとはどんなお仕事があるんですか?

福島「冒頭に言った電子カルテチェックがあって、これは患者さん全員の食事オーダーをチェックして、間違えないよう調理場に伝えていく作業。あとは細々いろいろと、たとえば病院食を出すときに使う食器の選定とかもあるね」

同じ献立であっても、お皿の彩りひとつで風味の引き立ちかたが変わってくるという。

どんな食器を使うかも栄養士さんが頭を悩ませるところなのだ。

食器の選定作業


器の裏面も入念にチェック

また、病棟にはさまざまな患者さんがいらっしゃるので、安定して食べていただけるかどうかもポイントなんだそう。器の裏面まで入念にチェックされる姿は、さながら茶人か骨董商のようである。

仕事で苦労すること

お仕事のうえでのご苦労も多いのではないでしょうか?

福島「こちらの思いが厨房の現場にうまく伝わらないときがいちばん苦労するかなあ」

たとえばどんなことですか?

福島「煮物でも火加減が浅いと具材が硬いままやし、逆に煮過ぎると煮崩れするし、同じレシピでも作り手によって味が大きく違ってくるんよ」

久米「現場の調理師さんが、食べる人の立場にたって作ってくださったときは私たちも嬉しいですし、そうでないときは悲しい気持ちになってしまうこともあります」

やはり職員間のコミュニケーションに苦労されることが多いようだ。

福島「いろんな部署の職員さんに気安く訪れてほしいので、こんな人形を置いたりしてるんやけどね」

見れば可愛らしい人形たちが置かれている。

人形の名前はなんていうんですか?

福島「あ、名前付けてないわ(笑)」

久米「苦労といえば主任のお守もありますけど一応これは冗談ということにしておきます(笑)」

いえいえ、こういう冗談を言い合える関係なら大丈夫と思います!

福島「検食もタイヘンやんね～」

久米「美味しく食べられる味つけか? 適切な柔らかさか? などチェックしながら食べているので、常にプレッシャーがあります」

福島「それに検食って、ふつうに美味しく仕上がっていたら一口で済むけど、アレ? って仕上がりのときこそ、修正の指示を出すため何回も食べんとアカンからね」

不味いときほど何度も食べなくてはいけない。考えてみれば皮肉な話である。

吾輩は人形である。名前はまだ無い。

仕事で嬉しいこと、プライベート

お仕事うえで嬉しいことは?

福島「患者さんから、食事美味しかったよ～って言っていただけるときかなあ。がんばって献立考えた甲斐があった! って心が救われるね」

久米「あとは食事の管理で患者さんの検査値が改善したときでしょうか。健康改善の一助になれた喜びがありますね」

栄養士さんって、プライベートでの食生活もしっかり自己管理してらっしゃるんですか?

福島「モチロン! ……やんね、久米さん?」

久米「そうですね(笑)。全体のバランスには気を配っていますし、季節の野菜は取り入れるようにしています。主任さんはお菓子が大好きで、新製品が出たら必ず買っておられるようですけど」

福島「食の幅を広げるためには、お菓子の新製品をチェックすることも大切なんよ。うん!」

久米「プライベートでも仕事熱心な、鑑のような主任さんですよね(笑)」

プライベートでも私財を投げ打って新しいお菓子を試食し続ける仕事の鬼、福島主任。そして、そんな主任さんをユーモアも交えながらサポートする久米さんら周りの栄養士さん。

こんな心強い栄養士さんたちが担っておられる当院の栄養管理室は、きっと今後も盤石にちがいないと確信を深めた取材体験であった。

(取材と原稿／臨床心理士・名倉)

取材協力

久米洋子(くめ ようこ)　福島由理(ふくしま ゆり)